

江戸・東京の土蔵の変遷に関する研究

A Study on the Transition of *Dozo* (Storehouses) in Edo and Tokyo

森下 雄治

Yuji Morishita

立命館大学 客員研究員 衣笠総合研究機構 (〒603-8577 京都市北区等持院北町56-1)

Visiting Researcher, Ritsumeikan University, Kinugasa Research Organization

Since the Great Fire of Meireki (1657), riversides were the only place where the construction of *dozo* (storehouse with mud walls) were allowed in Edo. In the late 17th century, people started to reform and convert the riverside storehouses as commercial facilities and residences, which was eventually established as *dozo-zukuri* (house with thick mortar walls), a fireproof architecture, in the early 18th century. While the fireproof function of *dozo-zukuri* comes from the closed nature of *dozo*, the commercial need for openness contradicted its feature. From mid-19th century till Meiji era, there was a trend to solve the problem by adding *sodegura* (attached storehouse), dedicated to preventing fire, to the main *dozo-zukuri* building converted as a *nuriya* (stucco house).

Keywords: *Dozo* (storehouse with mud walls), *nuriya* (stucco house), *dozo-zukuri* (house with thick mortar walls), Edo

1. はじめに

日本の防火建築の歴史的系譜をたどれば、物品を保管するための「文倉」、「土倉」、「土蔵」などの建物が挙げられる。その嚆矢となる史料として『春日権現験記絵』に描かれた「倉」をみることができる。作製年代¹⁾からみて、鎌倉後期には防火を目的とした「倉」が成立していたと考えられる。この「倉」の近世の様子をみてみると、高屋²⁾が近世京都の都市景観を描いた第二定型の洛中洛外図を考察し、都市の中にみられる「土蔵」の形式は17世紀までに成立し、その性格を権力の所在や経済的繁栄を示す象徴性の強い形態だと分析している。この知見を踏まえて、江戸初期の『江戸名所図屏風』『江戸図屏風』に描かれた「土蔵」の意匠を検討すると、後述するように『洛中洛外図』の「土蔵」に類似し、史料の景観年代からみて17世紀前半から明暦3年(1657)大火以前、江戸の町にも京都と同様な「土蔵」が存在していたと考えられる。

一方、居住用の防火建築としてまず挙げられるものに「塗家」がある。「塗家」は屋根、軒裏、壁面、開口部の木部を土や漆喰で薄く塗籠るものである。拙稿³⁾で指摘したように、明暦3年の大火後から享保期(1716～1736)にわたって施行された防火施策の中でうまれたもので、「塗家」は既存の木造の町家を簡易に防火建築に改造する形式であった。「塗家」は防火建築としての有効性が限定的⁴⁾であったため、享保前期には「土蔵」を祖型とする外壁木部のすべての構造が隠れるほど厚く塗られた総塗籠式の「土蔵造」が奨励され、その後地域を指定して導入⁵⁾がなされた。

このように江戸の防火建築は、「土蔵」、「塗家」、「土蔵造」と進展してきた。これらに関して多くの研究がなされ、近年の研究では横田⁶⁾の日本橋地区の「土蔵」に関するもの、前掲の拙稿の「塗家」の変遷に関する考察、小沢⁷⁾の日本橋地区の「土蔵造」の変遷についてのものなどが挙げられる。ただこれまでの研究を整理すると、個々の対象だけを考察するものが多く、「土蔵」、「塗家」、「土蔵造」の相互の関係に言及するものは管見の限りなかった。

本稿は、江戸の町触、地図情報、発掘資料、絵画史料、個別商家の史料などに着目し、「土蔵」の変遷を主たる対象として、「塗家」や「土蔵造」との関係を明らかにすることを目的とする。

2. 江戸の「土蔵」



図1 春日権現験記絵



図2 洛中洛外図屏風

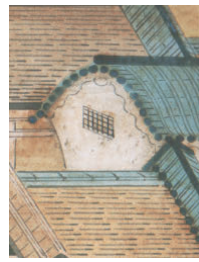


図3 江戸名所図屏風



図4 姫路城

図1は前述の『春日権現験記絵』に描かれた「倉」である。火災の余燼が消えやらぬ中、焼け残った「倉」とそこに避難する人々の姿が描かれている。この「倉」は、屋根、庇、壁が白く塗籠られ、開口部は2枚の観音開きの戸で構成されている。類焼を免れ、避難所に使用されていることから、防火建築としての備えが出来ていたものと推察できる。類焼を防ぐためには、屋根、軒裏、壁は不燃材で被覆され、開口部は火災の際、速やかに不燃の戸で閉じることが求められる。したがって鎌倉後期までに生成したと推察できるこのような「倉」の形式は、後に生成する防火建築の祖型として継承されていったものと考えられる。

図2は第二定型洛中洛外図と同系統で、元和6年(1620)以降の景観年代⁸⁾とされる『前田本』の中の「土蔵」である。図3は景観年代⁹⁾寛永年間(1624～45)とする『江戸名所図屏風』に描かれた「土蔵」である。

この両図は、屋根は起りで本瓦葺き、壁は漆喰で塗籠、開口部は土戸を備え、軒裏の垂木は曲面状の漆喰で厚く塗籠められ、類似した仕上げが施され、その所在は街区内部中央に配されていた。この『江戸図名所図屏風』と景観年代が共通する『江戸図屏風』の中の「土蔵」も同様な特徴を有しており、元和～寛永年間(1615～1645)には、京都の「土蔵」の影響を受けた「土蔵」が、江戸の街区内部に所在していたと考えられる。特にこの軒裏の曲面が連続する漆喰処理は、図4の姫路城天守の軒裏にもみられ、新発田城旧二の丸櫓など慶長年間(1596～1615)に誕生した総塗籠式の近世城郭建築にも採用されている。山田¹⁰⁾は、この慶長年間の城郭建設の最盛期を左官工事の技術革新としてとらえ、元和偃武(1615)以降、一国一城制による城郭建築の停滞のため、膨大な生産力による安価で先端な左官技術は、町方の建築へ波及していったとしている。

このように江戸初期の「土蔵」は、城郭建築や京都の「土蔵」の影響を受け、『江戸名所図屏風』や『江戸図屏風』にみるように街区内部中央に配されていた。

3. 「土蔵」と「塗家」「土蔵造」

この江戸の「土蔵」のその後の変遷を以下にみてみることにする。明暦3年(1657)の大火後、幕府は「瓦葺の事、国持大名といふともつくるべからず、但倉廩はくるしからず」¹¹⁾との令を発している。後段に「倉廩はくるしからず」とある。「倉廩」は穀物等の「倉」とされ「土蔵」との関係は不明で、「瓦葺の事」や後述の町触からみて町中の「土蔵」は許可されていなかったと考えられる。

寛文10年(1670)8月の町触に「町中河岸通ニ土蔵立候事、跡々より御赦免被成候河岸之外、堅無用ニ可仕候、縦御赦免被成候河岸通たりといふとも、新規ニ土蔵造候ハ、両御番所江御断申上、御意を請、造可申候、但瓦土蔵塗垂蔵之外は、板葺萱葺之家など立置候ハ、早々崩取可申候事」¹²⁾とある。これは「前々から許可している河岸の『土蔵』以外は建ててはいけない。河岸に建てたい場合は許可を請え。但し瓦土蔵か塗垂蔵以外の板葺や萱葺のものは早々に取り壊すよう」との内容である。「塗垂」とは「土蔵より庇を作り出して、塗家にしたるをぬりたれと云い」とあり、また「塗家」とは「大壁と称えて屋外面全て塗籠て土蔵制に似たるもあり、巨戸に之有土蔵造りよりは壁薄し」¹³⁾とあって、「塗垂蔵」とは「土蔵よりは壁薄し蔵」で庇を持ったものであったと考えられる。このように河岸の「塗垂蔵」は後の「塗家」、「瓦土蔵」は「土蔵造」につながる形式をもっていた。

元禄12年(1699)5月に「河岸附之町々、河岸之蔵ニ而所帯仕、火を焚候由相聞不届ニ付、向後左様成儀、一切無用ニいたし、火を焼申間敷事」とあり、後段に「同蔵之前ニひさしを懸、諸色売買仕、是又不届ニ付、向後堅商売仕間敷事」との町触が出されている。そして同年6月には「河岸ニ土蔵御赦免被成候儀は、火事

之節商売物令焼失候得は、世上失墜ニ成候、又は火除け之ためニも可罷成哉と思召被仰付候所ニ、土蔵之内ニ致住居火を焚、其上土蔵に庇をかけ、表店同前に見世を出し商売致、其外見苦敷物差置段、旁不届ニ被思召候間、御赦免之物之外ハ向後猥に無之様ニ仕」¹⁴⁾とある。

この一連の町触は、「河岸の『土蔵』に居住し火を焚く者や、庇を懸け表通りの『見世』と同様に商売をするようなものがみられるようになった。居住したり、商売に転用してはならない」との内容であった。これらの商用や居住に転用された「河岸土蔵」は、拙稿¹⁵⁾ですでに指摘したように後述の防火建築導入における「塗家」や「土蔵造」の草創のものであったと推察できる。

享保5年(1720)4月20日に「町中普請之儀、土蔵造或ハ塗家瓦屋根ニ仕候事、只今迄ハ致遠慮候様相間候、向後右之類普請仕度と存候者ハ、勝手次第たるべく候、畢竟出火之節防ニも成、又ハ飛火無之為ニ候間、右之外ニも可然儀は、是又勝手次第ニ可仕事」¹⁶⁾との町触がある。これは「普請の際、『土蔵造』『塗家瓦屋根』を遠慮していると聞いているが、防火のためにこれより裁量にまかす」とのことであった。この町触にいたるまでの町年寄と町方とのやり取りをみると以下のようなようであった。

享保5年2月17日に「町々ニ而、瓦葺に仕度存寄も有之候哉、若又町人共遠慮ニ存罷在候相尋、返答可致旨被申渡候」との諮問がなされ、2月19日に町方から「瓦葺ニ仕候義、難仕奉存候由、町人共申候、然共五町十町ニ壱ツ式ツ程も塗家ニ造候者も御座候得共、壱町と続塗家ニ造候者無御座候」と町年寄に上申がなされ、同年4月10日には「町々塗屋ニ致し可然候哉、先頃被仰渡候節ハ不致落着候間、急ニ相談致し、明日中ニ書付差出候様被申渡候」との「塗屋」に関する諮問が再度名主に出されている。そして翌11日に「此段塗候而も、漸々ケ年余程持申候而も土落申候故、・・・猶又漆喰底ニ罷成、高直ニ可有御座候、左候は、迷惑可奉存候、右両様共ニ塗申候ハ、飛火之用心能御座候而も、只今分にては、小屋掛も軽く御座候間、塗家ニ難仕奉存候」¹⁷⁾との返答が町方から上申されている。これら一連の内容は幕府から町方に対して「瓦葺を遠慮しているのではないか」との問いに、「困窮仕候」との返答があり、それでは屋根を「塗屋」にしてはとの再度の要請に、屋根を土などで塗る「塗屋」の欠陥などを挙げ、「塗家ニ難仕奉存候」との応答であった。これらの経緯からみて、享保5年4月の「土蔵造」や「塗家瓦屋根」に関する町触は、町方との妥協案であったと推察でき、防火建築導入を図りたい幕府の奨励策であったと考えられる。また「塗家」や「土蔵造」の定義も不明で、後の建築規制において不備な影響をもたらしたといえる。

以上のように、明暦3年の大火後、町中の「土蔵」は禁止されていたが「河岸土蔵」は許可され、元禄期にその「河岸土蔵」から、享保前期に導入される「塗家」や「土蔵造」につながる形式が現れていた。そして享保5年に導入された防火建築奨励策は町方との妥協のもので、「塗家」や「土蔵造」の定義は曖昧なものであった。

4. 「土蔵」配置の推移

それでは町屋敷の「土蔵」の配置場所を検討するため、享保年間(1716～1736)に防火建築導入の施策がなされた日本橋地区で、その中心地である日本橋近くの下図5・6の発掘調査地の「土蔵」址をみることにする。

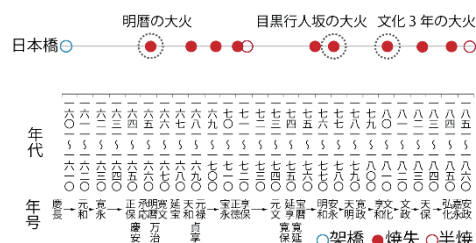
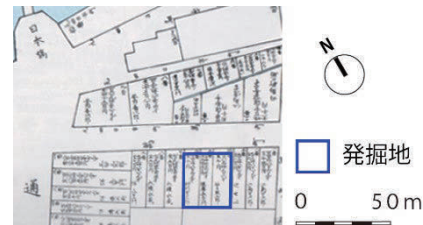


図5 享保年間御府内沿革図書

図6 明治6年第壱大区沽券図

図7 日本橋の架橋と被災歴

発掘地は現在の日本橋1丁目4・6番に所在し、図5¹⁸⁾は享保年間、図6は明治6年(1873)当時の所在¹⁹⁾を示す。図6にみるように当時は3筆に分かれていた。図7は火災による日本橋の焼失年一覧²⁰⁾である。調査は平成12～13年に行われ、図8・9はその調査報告書²¹⁾をもとに発掘地内の土蔵址地を生活面ごとに色分けして記した。生活面の数字は7～1面と降順に年代が新しくなり、土蔵址地の号数は報告書の調査番号に符合する。表1²²⁾は各々の生活面の廃絶年代を示す。なお生活面は14面までであるが、「土蔵」址がみられるよ

表1 発掘地生活面推定廃絶年代

生活面	推定廃絶年代	備考
第1面上	19世紀後葉	近代
第1面	19世紀中葉	幕末
第2面	18世紀末葉～19世紀中葉	
第3面	18世紀後葉ころ	
第4面	明和9年(1772)前後	目黒行人坂の大火
第5面	18世紀中葉(1750～60年代ころ)	
第6面	18世紀中葉(1740～60年代ころ)	
第7面	18世紀前葉～中葉	土蔵址がみられようになる

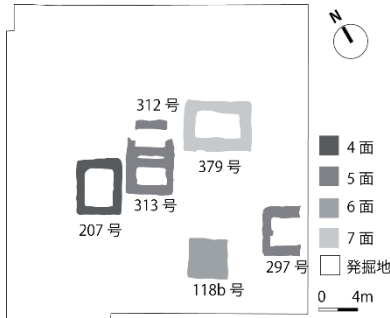


図8 生活面7～4面

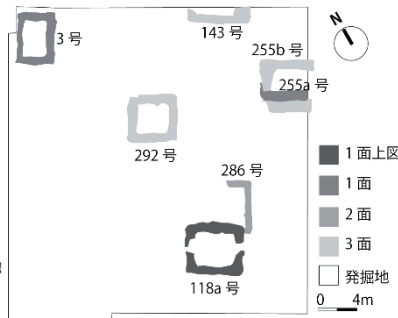


図9 生活面3～1面上

うになる7面～1面上までを図8～9に記し、1面上は近代を表す。

この地は日本橋から約80m南東に位置し、図7の日本橋の焼失状況からみて、享保期までに明暦3年(1657)の大火も含めて5回被災していたと考えられる。図8中の379号7面の「土蔵」は、図7と表1からみて一連の被災後、享保年間にみられるようになったと推察でき、前述の享保の防火建築奨励策とこの「土蔵」の出現は対応する。この「土蔵」の位置は、図5の所在図からみて、町屋敷の中央よりやや上に配置されていた。つづいて6～4面の「土蔵」址をみると、118b～297・312・313～207号と表通りに対して町屋敷中央から後方に位置していた。3面以降では、286号を除いて、292・255a.bと町屋敷中央から通りに接近し、後代の道路拡幅で欠損したとみられる143号は街路に面し、幕末の1面3号は通りに近接している。このことから4面の明和9年(1772)の目黒行人坂の大火後、表通りに接近もしくは接していく傾向が強かったことが分かる。

3面～2面頃の江戸の街並みを描いた絵画史料に『熙代勝覧』²³⁾がある。景観年代²⁴⁾は寛政8年(1796)～文化3年(1806)3月の大火以前とされ、下図10のように発掘地近くの日本橋を起点に今川橋に至る表通りを東方向から描写したものである。



図10 「土蔵造」指定地



図11 通石町の「土蔵」



図12 通銀町の町家と「土蔵」

『熙代勝覧』には、表通り沿いに84棟の町家と4棟の「土蔵」、建築中の1棟が描かれている。図11の「土蔵」はこのうちの2棟で、暖簾の屋号からみて左右の木造の商家に属する妻入の「土蔵」である。図12の「土蔵」は建築中の建物の背後に町家に接して姿をみせている。これらのことは前述の3面以降の「土蔵」配置と同様な傾向を示すものである。この地は享保7年(1722)に図10に示す範囲を指定して、建築規制²⁵⁾がなされた町である。図11～12にみるように、規制があるにもかかわらず木造の町家が軒を連ねる中、「土蔵」は表通りや町家の後に近接しており、明和の大火後、町家の防火のための配置であったと考えられる。

このように「土蔵」は享保に防火建築導入策が施行されると町屋敷の内部に現れ、明和9年の目黒行人坂の大火後、商家の防火のため、「土蔵」は表通りに接近もしくは接していく傾向が強かった。

5. 白木屋、西川、三井の構え

それでは商家の「土蔵」の配置を具体的にみتينすることにする。先の発掘地近くに、図13に示す白木屋があった。図13は嘉永年間(1848～1853)の復元図²⁶⁾を参照した。白木屋は寛文2年(1662)に創業し、寛文5年(1665)に図13の通1丁目の地に移った。図14の被災歴²⁷⁾からもわかるように、正徳元年(1711)～享保3年(1718)にかけて4回類焼し、その間、物品の防火対策として享保元年(1716)深川黒江町に蔵屋敷を購入²⁸⁾している。

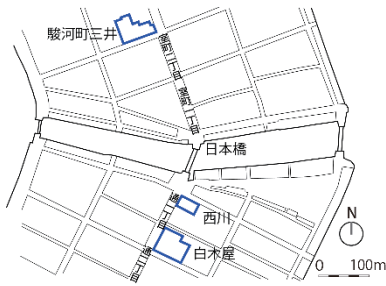


図13 三井・西川・白木屋所在地

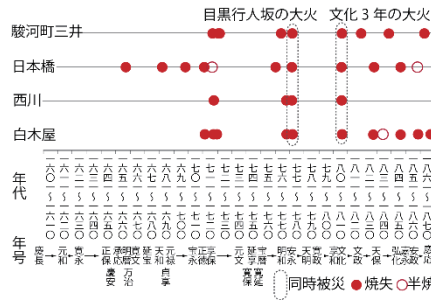


図14 三井・西川・白木屋被災歴

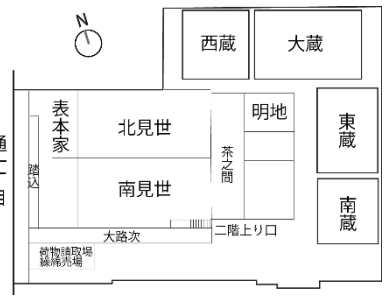


図15 白木屋享保17年(1732)作成指図

図14にみるように享保3年の火災から明和期まで類焼がなく、図15は17年(1732)作成とある指図²⁹⁾を写したもので、享保3年の火災後、普請された指図であると推察できる。前述の享保5年の防火建築奨励策、享保9年(1724)の日本橋南地区の防火建築規制策³⁰⁾、そして後述の白木屋の文書からみて、店舗(見世)は「土蔵造」、4棟の蔵は「土蔵」であった可能性が高いと考えられる。北見世・南見世・表本家の「土蔵造」は、通1丁目の表通りから屋敷後方に向かって配置され、そして後方の備えとしての4棟の「土蔵」は、町屋敷中央より後方の北と東の隣地境界近くに配されている。これらの構えは、江戸の火災時風向特性³¹⁾である北～北西方向からの延焼に対してのものであったと推察できる。

図14にみるように文化3年の大火後、白木屋は文政12年(1829)3月に再び大火に見舞われた。ただその際、店舗は焼失したものの、後述の文書にあるように「土蔵」は免れている。その翌月、『白木屋木村家大火後復興方針申渡』としての文書³²⁾が残されている。文書は『演舌書』として前段に「当店類焼いたし候儀は残念難尽申候得共、此度之火災世間一統之儀無是非無く事ニ候。然れども一之精力によって土蔵ニおみて何れも無聊別条」とあり、中段に「右大變ニ付当店本普請建方之儀、元來は塗屋建ニ候処其後土蔵作りニ成來り候。全体土蔵作り之儀は大造成事ニ候得は、近火等之節は迎も防方行届不申、其上万一怪我等有是候ては難述言語ニ大切之儀ニて、且は家之取壊、別て蔵々迄も手も届兼候道理彼は深く相考候得は、常々も安心ならず、元祖之思召ニも難相叶道理と存候。定て其地ニても同心之事と推察いたし候。依之已後末代土蔵建之儀は相止メ、塗家建ニ相定可申事ニ候。此段一統能々思慮可有之事ニ候」とある。これは「店舗は類焼したが、土蔵はいずれも無事であった。店舗は、当初塗屋でその後土蔵作りの普請を続けてきたが、土蔵作りは大造で延焼に対して防ぎきることができず、土蔵にまで手がまわらない。よって今後は土蔵建を止め、塗家建にすることにした」との内容である。店舗としての「土蔵造」は、営業時、1階の部分は開放的なものにする必要がある。だが火災時には、袖壁に設けた戸袋から土戸を引き出し、1階の開口部を締め切り、「用心土³³⁾と称する土で土戸の隙間を速やかに閉じる作業が必要であり、これらの作業は出入りの左官職が担った。文書に「近火等之節は迎も防方行届不申」そして「且は家之取壊」とあるのは、近火の際はこの作業が間に合わない「土蔵造」という家の形式に「取壊」があるとの指摘である。商業活動のために求められる開放性、閉鎖性を旨とする「土蔵」から派生した「土蔵造」、この矛盾する課題に対して、被災の経験から、今後店舗部分は類焼は覚悟し、費用や簡易さから速やかな再建が可能な「塗家」に、そして「蔵々迄も手も届兼候道理彼は深く相考候」と防火の主体を「土蔵」にするとの主旨を記したものであったと考えられる。

その後4回被災し最後の類焼は慶応2年(1866)で、明治に入ってから写真³⁴⁾図16が残されている。被災歴からみて慶応2年以降の構えであったといえる。写真には「塗家」の北隣に「袖蔵」が配され、「塗家」と「袖蔵」が一体となり、意匠も統一した表構えが形成されている。前述の『演舌書』の内容からみて、この「袖蔵」は延焼を考慮した配置で、「塗家」の防火と商家の象徴としてのものであったと推察できる。

次に西川について検討する。西川は白木屋や日本橋に近く、被災歴も同様な傾向であったと想定できるが、図14にみるように類焼は相対的に少なく、記録の上で不明な点が多い。そのため近隣の日本橋の被災歴、図14を参照すると、橋は弘化3年(1846)と安政5年(1858)に被災している。これらのことから西川は幕末に類焼した可能性は高い。その頃の通一丁目東側の家並を連続的に描いたものに『日本橋通一丁目写生図』³⁵⁾がある。図17はこの図から西川の店舗を抜き出したもので、他の商家の動向から、天保14年(1843)～嘉永5年(1852)間の景観とされる。西川の構えは「塗家」の北に「袖蔵」が配され、北からの延焼防止を目的とした統一した構えがみられる。また後掲の明治18年(1885)の版画も同様な構成である。このように幕末頃の西川の表構えは「塗家」と「袖蔵」が一体となった形式で、明治期もその構えは継承されていたことが分かる。

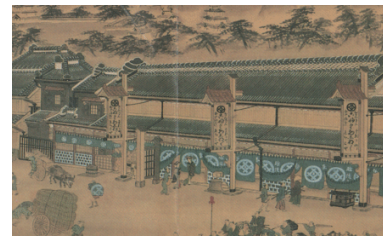
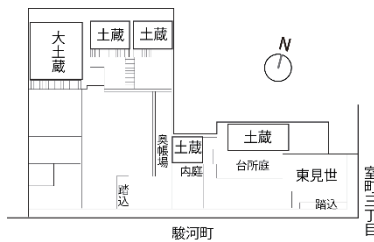
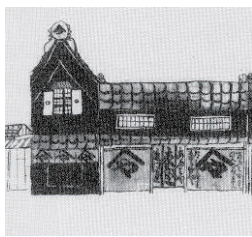


図16 明治中期の白木屋

図17 幕末頃の西川

図18 宝暦7年駿河町三井の指図

図19 文政の頃の駿河町三井

つづいて図13に所在を示す駿河町三井について検討する。図18は宝暦7年(1757)の指図³⁶⁾を写したもので、東見世の背後北西方向に庭を挟んで2棟の「土蔵」、同じように西の店舗の背後に3棟の「土蔵」が配され、先にみた白木屋の北～北西方向からの延焼に対する構えと同様な配置であった。図19は文政頃(1818～1829)とする駿河町三井の絵図³⁷⁾で、大規模な「塗家」の北に「袖蔵」が描かれている。図14の被災歴からみて文政2年(1819)の類焼後の表構えであったと考えられ、「塗家」と「袖蔵」とは一体となった意匠を備えておらず、まだ統一した表構えは形成されていなかった。

このように個々の商家の「土蔵」配置は、先の発掘地の「土蔵」の変遷に対応するもので、この過程で生成した表通りの「土蔵」は町家の防火を補完し、幕末から明治にかけて「土蔵造」や「塗家」と緊密に結び付き、「袖蔵」として商家の統一した表構えをみせることになったと考えられる。

6. 明治の「袖蔵」

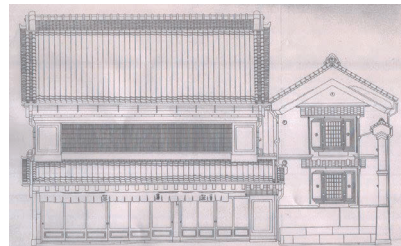


図20 通旅籠町の街並み

図21 小舟町の「河岸土蔵」

図22 川越の「塗家」と「袖蔵」

図 20～21 は東京府が大正 8 年(1919)に発刊した『東京府史蹟』³⁸⁾に掲載されている写真で、図 20 は「塗家造りの町並み 通旅籠町」、図 21 は「小舟町川岸の土蔵」とあり撮影年は不明である。通旅籠町は常盤橋から浅草橋に至る大通りの中程にあり、明治には図 20 のような呉服商や木綿問屋などの大店が並ぶ街並みが形成され、通りの奥に「袖蔵」が見える。小舟町には入堀に面した河岸があり、荷揚げ場として図 21 の「河岸土蔵」が連なっていた。写真から分かるように「土蔵造」の祖型としての構えをみることができる。

図 22 は明治 26 年(1893)の川越大火後、防火のため東京の「塗家」「土蔵造」の形式を導入した川越の商家の構えで、東京にはこのような図面は不明で参照のため掲げた。図面³⁹⁾にみるように「塗家」と「袖蔵」の調和した表構えをみることができる。なお、図 22 に「塗家」とあるのは、この調査の狩野⁴⁰⁾が「塗家」と「土蔵造」の形式を「外観上で両者を区別することは大変困難である」と指摘していることによる。享保の防火建築導入の際の曖昧さが「塗家」と「土蔵造」の混濁を生じさせたと推察できる。

次にこのような明治の防火建築がどのように分布していたかを以下にみることにする。

図23～24は明治20年(1887)刊行の『参謀本部陸軍部測量局東京測量原図』⁴¹⁾を参照して作成した。測量原図には防火建築と木造建築とが類別されているため、防火建築のみをトレースしたもので、この当時レンガ街の銀座地区を除いて、RC造やレンガ造のものはほとんど公共建築で、公共建築を除外した。

図 23 は日本橋以北の日本橋から内神田一帯の分布図で、常盤橋～浅草橋間、日本橋～今川橋間の表通沿いに防火建築が集中していたことが明瞭である。特に前述の通旅籠町や小舟町付近は顕著である。これらの通りの背後に広がる点状の防火建築はその規模から「土蔵」と考えられ⁴²⁾、通りの「塗家」や「土蔵造」と結び付き、商家の防火を補完していたと推察できる。図 24 は日本橋から京橋に至る地区で、日本橋～京橋間の通り沿いに集まる防火建築は、日本橋以北に比べて集中度が少ないが同様な傾向を示している。



図23 明治前期の防火建築の分布(日本橋以北)



図24 明治前期の防火建築の分布(日本橋以南)

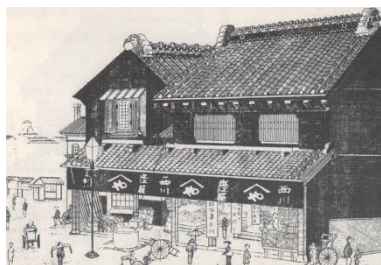


図25 西川の「塗家」と「袖蔵」

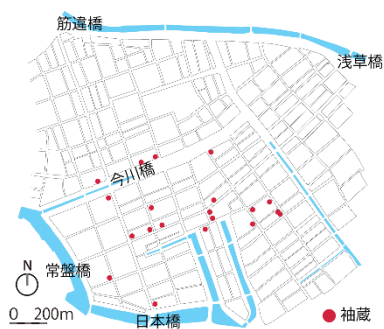


図26 日本橋以北の「袖蔵」

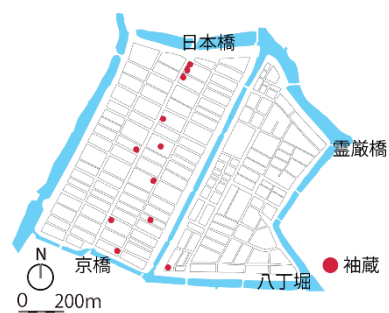


図27 日本橋以南の「袖蔵」

つづいて「塗家」や「土蔵造」と結びついた「袖蔵」の所在の傾向を考察する。

図 25 は前述の西川の店舗を版画にしたもので、明治 18 年(1885)に刊行された『東京商工博覧絵』⁴³⁾に掲載されている絵である。この書は東京各区の商家の表構えを記録している。この中で日本橋以北と以南の「袖蔵」の傾向をみるため、住所が特定できる「袖蔵」のある商家の所在を記したものが図 26～27 である。図にみるように、図 23～24 の防火建築が集中していた地域とほぼ重なり、「袖蔵」は「塗家」や「土蔵造」と結び付き、防火だけでなく商家の表構えの一端を担っていたと考えられる。

このように明治中期の「袖蔵」のある商家の所在の傾向は、日本橋以北では常盤橋～通旅籠町間に、日本橋以南では京橋までの通沿いに多く、「塗家」「土蔵造」の防火建築が集中する地域と重なる傾向であった。

7. まとめ

これまで明らかになった諸点を以下に整理する。

- 1) 江戸初期の「土蔵」は、街区内部中央に配置されていた。
- 2) 明暦の大火後、町中の「土蔵」は禁止され、「河岸土蔵」は許可されていた。元禄期にその「河岸土蔵」から、享保期に導入される「塗家」や「土蔵造」につながる形式が現れていた。
- 3) 享保に防火建築奨励策が施行されると「土蔵」は町屋敷の内部に現れ、明和9年の目黒行人坂の大火後、町家の防火のため表通りに接近もしくは接していく傾向が強くなった。
- 4) この過程で生成した表通りの「土蔵」は、幕末から明治にかけて「土蔵造」や「塗家」と結び付き、「袖蔵」として商家の統一した表構えをみせることになった。
- 5) 明治中期の「袖蔵」のある商家の所在の傾向は、日本橋以北では常盤橋～通旅籠町間に、日本橋以南では京橋までの表通沿いに多く、防火建築が集中する地域と重なる傾向であった。

このように、江戸の「土蔵」は明和以降、表通りに接近し、幕末には「土蔵造」や「塗家」と結びついて「袖蔵」という江戸固有の「土蔵」が生まれた。この商家形式の誕生は主に江戸の火災特性によるも

のであったと考えられる。

参考文献

- 1) 小松茂美編：続日本の絵巻13，中央公論社，1p，1991.
- 2) 高屋麻里子：洛中洛外図屏風に描かれた町家と土蔵の変遷，日本建築学会計画系論文集No607，PP.157-162，2006.
- 3) 森下雄治・山崎正史：江戸の塗家に関する研究，歴史都市防災論文集Vol.6，pp.31-36，2012.
- 4) 森下雄治・大窪健之：江戸の主要防火政策に関する研究，日本都市計画学会論文集Vol.47，pp.721-726，2012.
- 5) 近世史料研究会：江戸町触集成，第4巻，塙書房，p.96，pp.200-2001，1995.
- 6) 横田佳代子・高屋麻里子：江戸日本橋地区の土蔵に関する研究，日本建築学会梗概集2003号，pp.461-462，2003.
- 7) 小沢朝江：日本橋通・本町通の商家の建築履歴からみた土蔵造町家の変遷，日本建築学会梗概集2006号，pp.1-2，2006.
- 8) 狩野博幸：洛中洛外図屏風，青幻舎，pp.15-18，2007.
- 9) 内藤正人：江戸名所図屏風，小学館，p.5，2003.
- 10) 山田幸一：壁，法政大学出版局，p.162，p.167，p.192，1981.
- 11) 東京市役所編纂：東京市史稿市街篇，第7，臨川書店，p.153，1930.
- 12) 近世史料研究会：江戸町触集成，第1巻，塙書房，p.258，1994.
- 13) 大槻文彦：大言海，富山房，pp.623-624，1937.
- 14) 近世史料研究会：江戸町触集成，第2巻，塙書房，pp.396-397，p.404，1994.
- 15) 森下雄治：江戸の土蔵造の生成と変遷に関する研究，日本建築学会関東支部研究報告集83号，pp.669-672，2013.
- 16) 前掲書14)：第4巻，p.16，1995.
- 17) 近世史料研究会：江戸町触集成，第4巻，塙書房，pp.8-9，pp.13-16，1995.
- 18) 幕府普請奉行編：御府内沿革図書，6巻，原書房，p.143，1987.
- 19) 東京都中央区教育委員会：中央区沿革図集日本橋篇，人文社，pp.132-133，1995.
- 20) 東京都江戸博物館：調査報告書，第16集，p.187，2003.
- 21) 日本橋一丁目遺跡調査会：日本橋一丁目遺跡，日本橋一丁目遺跡調査会，PP.31-33，PP.49-51，PP.91-93，PP.115-121，PP.145-149，PP.183-189，PP.203-206，PP.223-227，2003.
- 22) 前掲書21)，p.461.
- 23) 小澤弘・小林忠：『熙代勝覧』の日本橋，小学館，pp.8-10，2006.
- 24) 浅野秀剛・吉田伸之：大江戸日本絵巻，講談社，pp.76，2003.
- 25) 前掲書17)，p.96.
- 26) 国立歴史民俗博物館：国立歴史民俗博物館研究報告書，第23集，1989.
- 27) 白木屋：白木屋三百年史，白木屋，pp.638-649，1957. 西川：四百年史稿本，年表，1966. 三井文庫：三井事業史，第1巻，pp.684-690，1980.
- 28) 白木屋：白木屋三百年史，白木屋，p.638，1957.
- 29) 永代持本家絵図面：白木屋文書，東京大学経済学部資料室.
- 30) 前掲書17)，pp.200-201.
- 31) 森下雄治・大窪健之：安政江戸地震における地震火災に関する研究，地域安全学会論文集No23，p.12，2014.
- 32) 東京都：東京市史稿産業篇，第五十二，pp.65-66，2011.
- 33) 近世史料研究会：江戸町触集成，第11巻，塙書房，pp.230-231，1999.
- 34) 前掲書28)，p.253.
- 35) 高橋康夫・吉田伸之・宮本雅明・伊藤毅：図集日本都市史，東京大学出版会，pp.226-227，1993.
- 36) 三井文庫：三井事業史，第1巻，p.178，1980.
- 37) 前掲書35)，巻頭図.
- 38) 東京府：東京府史蹟，洪洋社，pp.43-44，1919.
- 39) 川越市教育委員会：川越市伝統的建造物群に関する研究報告書，付図，1976.
- 40) 前掲書39)，巻頭.
- 41) 内務省地理局：参謀本部陸軍部測量局五千分一東京図測量原図，日本地図センター，2011.
- 42) 前掲書21)，p.444.
- 43) 湘南堂書店：東京商工博覧絵，p.327，1987.